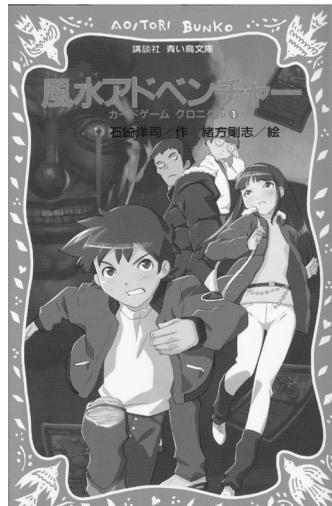


現は、三十年ほどの歳月を経て、一部の児童文庫で本格化しているのではないか。そこで本稿では、このような動向を児童文庫のキャラクター小説化と捉え、マンガやアニメのように本を読むという多メディア時代における物語体験について考察することにした。

2 表紙絵にみる児童文庫のキャラクター小説化

ここでは、「アニメ塗り」調の表紙絵（CGを含む）に着目し、児童文庫のキャラクター小説化を明らかにしたい。表紙絵はキャラクター小説の要件では必ずしもないが、児童文庫の変容を可視化している点で注目に値すると考えるからである。なお、新城カズマによれば、「アニメ塗り」とは「アニメのセル画の塗り方」で、「人物などの輪郭の中を単色でどばっと塗りつぶし、立体感や影（つまりベイス）になる単色よりもちょっとだけ濃い別の単色）をつけることで表現する」手法である^{注4}。ライトノベルの表紙絵に「アニメ塗り」が見受けられるようになるのは一九九〇年にシリーズが開始された「スレイヤーズ」（神坂一・作／あらいずみるい・絵、富士見ファンタジア文庫）以降だという。児童文庫に「アニメ塗り」調の表紙絵が用いられた事例としては、石崎洋司の「カードゲーム」シリーズ（講談社青い鳥文庫 二〇〇一〜〇五）が象徴的だ。同シリーズでは、第一部から第二部への移行に伴い、イラストレーターがは



(図1)

やしひろから緒方剛志(図1)に変わっているからである。検証については今後の課題であるが、以上の変容が生じた二〇〇四年前後に、児童文庫におけるイラストの変容が生じたのではないか。

緒方はライトノベルを代表するシリーズの上遠野浩平「ブギーポップ」（電撃文庫 一九九八〜）のイラストを手がけている人気イラストレーターである。眉村卓の『ねらわれた学園』（講談社青い鳥文庫）が緒方のイラストによってリニューアルされたのは二〇〇三年のことだ。緒方によるCGを用いた「アニメ塗り」の表紙絵の登場は、児童文庫の一部がライトノベルなどの隣接ジャンルとの同時代性を獲得したことを示唆している。

「アニメ塗り」調の表紙絵の事例としては、後述する「若おかみは小学生！」シリーズ(合丈ヒロ子・作／亜沙美・絵 講